

明治大正期の『婦人画報』（1905～1926）に見る ピアニスト小倉末子と閨秀音楽家たち

津 上 智 実

Pianist OGURA Suye and Women Musicians Reported
in the Women's Graphic Magazine *Fujin Gabou* in the Meiji and Taisho Eras (1905-1926)

TSUGAMI Motomi

Abstract

This paper reports the result of an examination of a women's graphic magazine, named *Fujin Gabou*, in the Meiji and Taisho eras, published since 1905 in Tokyo, in order to make clear how pianist OGURA Suye (1891-1944) and other female musicians were represented in its gravures and articles, and further to understand what position western instruments, particularly piano, held in female education in Meiji Japan.

Ogura appeared six times in gravure pages, once in an illustration, three times in dedicated articles and five times in related articles. This number of times ranks, apart from incidental mention made e.g. of accompanists, first among the female Japanese instrumentalists and second, next to the prima donna MIURA Tamaki, among the female Japanese musicians in general.

The female education in Meiji Japan made much of flower arrangement, tea ceremony and *koto* playing, but later also of western instruments such as violin and piano. While *koto* kept essential, piano became increasingly important as a part of female education, especially for young women who had graduated from high school and were preparing for marriage.

The *Fujin Gabou* in the Meiji and Taisho eras had a readers' section for *waka*. When 'piano' was given as its theme in 1920, the contributed works showed a sharp contrast in terms of their internalization of this instrument against those in 1912 for the same theme. This difference reveals a gradual penetration of piano into the education and daily life of the Japanese women of this period.

Graphic magazines such as the *Fujin Gabou*, carrying gravures, articles and advertisements, attracted and reflected a variety of interests of the then women at large. The result of this paper suggests that a more extensive examination of them will shed a revelatory light on the role piano played in the female education in Early Modern Japan.

キーワード： 婦人画報、小倉末子、ピアニスト、ピアノ、女性音楽家、明治大正期

Key words: *Fujin Gabou*, OGURA Suye, pianist, piano, women's musicians, Meiji and Taisho eras

本学音楽学部音楽学科教授

連絡先：津上智実 〒662-8505 西宮市岡田山4-1 神戸女学院大学音楽学部音楽学科
tsugami@mail.kobe-c.ac.jp

本論は、明治大正期の婦人グラフィック雑誌『婦人画報』（発行期間1905年～現在）を取り上げて、その口絵（グラビア）と記事におけるピアニスト小倉末子¹⁾（1891～1944）と女性音楽家たちの扱いを検討すると共に、大正期における女性の音楽的教養とその中でピアノの位置を明らかにすることを目的とする。

そもそも婦人雑誌が商業誌として成立するためには、一定数の購読者層の存在が必要とされる。近代日本における女子教育の進展と、それに伴う女性の読者の誕生があって初めて、婦人雑誌なるものが存在しうる。前田愛『近代読者の成立』（1973）によれば、大正期には「婦人雑誌の急激なる発展」があり、それは大正中期から飛躍的な発展を見せた新中間層の拡大と、女子中等教育の充実によって支えられていた。高等女学校の学校数と生徒数は、大正2年の213校、68,367人から、大正14年の618校、315,765人まで拡大しており²⁾、学校数は約3倍、生徒数は約4倍の伸びを示している。大正期に女性の文化が大きく変化していった背景には、このような読書と読者の拡大があった。

日本の近代化において、新聞と雑誌という新しいメディアの登場が果たした役割には大きなものがあったが、新聞が家庭単位での購読を主としていたのに対し、雑誌はより個人的な購読という傾向を持っていた。永嶺重敏『雑誌と読者の近代』（1997）によれば、雑誌は「単にニュースや情報を得るためのメディアではなく、それは読者との複雑かつ多様な強い愛着関係の中で存在して」おり、いずれの雑誌においても、その投書欄に頻出してくるのは「濃密な人格的一体感の中で受容しているさまざまな読者の姿」³⁾であった。明治大正期の『婦人画報』には読者の投書欄は設けられていなかったが、本論では「懸賞和歌」の欄を手掛かりに、当時の読者たちの声を聞くことを試みてみたい。

1) 『婦人画報』について

『婦人画報』は、日露戦争が終わった翌年の明治38（1905）年に創刊された婦人グラフィック雑誌で、誌名や発行社名の変更を経ながらも⁴⁾、現在まで誌名を残している総合女性誌である。大型のB5判、画報40頁、読物60頁という構成で、定価25銭（大正末年には画報56頁、読物192頁、定価80銭）であった。「女界の活動、教育、好尚、流行等の事実を画報し得て、さらに善美なる傾向を助長」することを目的として創刊され（「発行の辞」）、始め国木田独歩（1871～1908）、続いて鷹見久太郎（1875～1945）⁵⁾が長く編集に当たった。創刊号には大隈重信や成瀬仁蔵が文を寄せ、三輪田真佐子や棚橋絢子、下田歌子らの女子教育者がしばしば寄稿を行った。アート紙を用いた画報には皇族、華族、知識階級の写真が多数掲載され、国内外の女性の活躍、女子教育の場、流行の服装や髪型等が紹介された。本文の読物では、女性の教養やたしなみ、家庭改善、季節料理等が取り上げられ、小説も多数掲載された。

購読層については、第237号（大正14年6月1日）153頁に「本誌は発刊以来既に二十箇年に垂んとする古き歴史を有し、おそれ多くも長きたりを初め奉り、各宮妃殿下、姫宮殿下、引続いて御愛読をたまう無上の光栄を有して居ります」とあり、皇族を含む上流階級から、高等女

学校卒業程度の教養を身につけた一定の知識層に読まれていたものと推測される。

今回の調査に用いたのは、『DVD-ROM 版婦人画報、明治・大正期』（京都：臨川書店、2004）で、ここには創刊号（明治38年7月）から第255号（大正15年12月）までの全285冊、約59,000頁が収められている。添付の使用説明書によれば、約33,000件の検索用データベースが備えられているが、検索機能は十分ではなく、多くの音楽家たちの名前は検索対象から洩れている。記事のメイン・タイトルに含まれるキーワードはヒットするが、副題に含まれるキーワードはヒットしないといった問題も多く、最終的には1頁ずつ目を通していく他なかった⁶⁾。

2) 画報に見るピアニスト小倉末子

小倉末子（1891～1944）は神戸女学院の第27回卒業生（音楽部第4期生）で、東京音楽学校とドイツのベルリン王立音楽院で研鑽を積んだ後、アメリカで活躍して名声を上げ、帰国した1916年から最晩年に至るまで、ピアニストとして、また東京音楽学校のピアノ教授として活躍した人物である⁷⁾。

今回の調査によって、『婦人画報』の画報（口絵のグラビア）として小倉末子の写真が掲載されたのは、（1）第130号（大正6年1月）「御前演奏の諸閨秀音楽家」、（2）第145号（大正7年4月）「音楽会（楽聖グノー百年祭記念）」、（3）第163号（大正8年8月）「下阪の小倉女史」、（4）第174号（大正9年7月）「本社主催慈善音楽会」、（5）第222号（大正13年4月）「楽壇の明星と新進の花形諸嬢」、（6）第251号（大正15年8月）「十年間の沈黙を破って楽壇にのみがえったピアニスト小倉末子女史」の計6回であることが明らかになった（表1参照）。

この内、（6）については研究協力者からの情報提供によって早くからその存在を知っていたが、他の5件は今回の調査で初めて見出された。その内、（1）（2）（5）は他の新聞や雑誌でも用いられたことのある写真を、他の音楽家たちの写真と組み合わせたものであるが、（3）と（4）の2点はまったくの初出である。この2点の内容を見ておこう。

（3）は写真のキャプションに「七月十九日大阪市中央公会堂なる演奏会に出演の為、下阪したるピアニスト小倉末子女史と其義姉マリヤ夫人」とある通り、大正8（1919）年7月19日に大阪中央公会堂で行われたピアノ同好会および大阪楽友会主催「小倉末子、鈴木のおぶ子女史出演大演奏会」に関わる写真である。同年7月19日付『大阪朝日新聞』の記事によれば、7月18日に東京から来阪した小倉末子は「是れは又珍しい、何時も見慣れたあのキツとした洋装とは打って変わった優美な和服姿青陶磁色の派手な豎縞明石の薄物を身に纏うて翡翠の帯締めとダイヤの指輪がキラリと輝く」という出で立ちであったという。今回見出された写真は、正にその姿で大阪駅に降り立った時のものである。この時は、大阪朝日新聞社の記者が途中から車中に入り込んでインタビュー取材を行っており、車中での写真、宿泊先の大阪ホテルでの写真、翌日の演奏会での写真が新聞や他の雑誌（『淑女画報』大正8年9月号）に掲載されているが、そこにさらに1枚が加わった形である。

（4）は大正9（1920）年5月16日に東京音楽学校奏楽堂に於いて行われた東京社主催慈善音楽会の出演者記念写真で、洋装の小倉末子は、和装の武岡鶴代と立松房子を両脇に従えて、一人だけ椅子に腰掛けた姿で写っている。戸外での写真で、おそらくは東京音楽学校の庭で写

表 1) 明治大正期の『婦人画報』の画報に見る小倉末子

<p>(1) 第130号 (1917年 1月 1日)「御前演奏の諸闊秀音楽家」皇后陛下が昨年11月16日上野公園なる東京音楽学校に行啓あらせられました折、長くも御前に於いて演奏の光栄を担われました女流音楽家の方々で、右より(一)は小倉末子の君、(二)は田中久子の君、(三)は長坂好子の君、(四)は久野久子の君。左は音楽学校職員諸氏の鹵簿奉迎の光景であります。</p>
<p>(2) 第145号 (1918年 4月 1日)「音乐会と茶会」(上図) 楽聖グノー百年祭記念音楽会は3月2日上野公園なる東京音楽学校にて行われました。この写真は当日の演奏者の方々と右より小倉末子の君、ルアノフ夫人、柳兼子の君其他。</p>
<p>(3) 第163号 (大正 8年 8月 1日)「讚美歌唱と下阪の小倉女史」(下図) 7月19日大阪市中央公会堂なる演奏会に出演の為、下阪したるピアニスト小倉末子女史と其義姉マリヤ夫人。</p>
<p>(4) 第174号 (大正 9年 7月 1日)「本社主催慈善音乐会」5月16日上野公園東京音楽学校に於て開かれた本社主催慈善音乐会は八百余名の来会者を得て盛況を極めました。(1) 横山彰子嬢の高音独唱、(2) 当日演奏の方々の記念撮影で(右より) 武岡鶴代嬢、小倉末子女史、立松房子夫人、(3) 藤間喜久栄嬢の舞踊、(4) 会場の内部。</p>
<p>(5) 第222号 (大正13年 4月 1日)「楽壇の明星と新進の花形諸嬢」ピアニストとして有名なる東京音楽学校教授小倉末子女史。声楽家として名ある同校教授長坂好子女史。ソプラノを以て名ある武岡鶴代女史。婦人作曲家として第一人者たる松島彝子女史。</p>
<p>(6) 第251号 (大正15年 8月 1日)「十年間の沈黙を破って楽壇によみがえったピアニスト小倉末子女史」</p>

したものであろう。なお、この写真は3年後の同誌第215号60頁の挿絵としても使われている。

その他、(1)は皇后東京音楽学校行啓時の手製の朝鮮服のポートレート⁸⁾を他の音楽家の写真と組み合わせた誌面、(2)はグノー百年祭記念音楽会での和装の小倉末子⁸⁾、(5)は扇子を手にきりっとした和服姿のポートレート⁹⁾を他の音楽家の写真と組み合わせた誌面で、(6)は帝国劇場でのリサイタル時の舞台写真である。

以上の写真に加えて、イラストでの掲載として、第174号(大正9年7月)37頁の黒澤富美子による「楽壇の人、東京社主催慈善音乐会のスケッチ」がある。ここではロング・ドレスを着てピアノを弾く姿が洒落たタッチのイラストで描かれている。

さらに、第206号(大正11年12月1日)の画報「婦人会関西連合大会」の下図「会堂内の聴衆」をよく見ると、舞台左脇の垂れ幕に「ピアノ独奏小倉末子女史」とあるが、舞台上は別の講演者であるので、「表1」には含めていない。

以上から、『婦人画報』において小倉末子は、画報として6回、イラストとして1回、以上の計7回取り上げられていることが明らかになった。

3) 画報に見る女性音楽家たち

大正期は女性の活躍が目覚ましく伸びた時代であるが、同時代の他の音楽家たちはどのように扱われていたのでしょうか。それを見て初めて、小倉末子の位置も浮かび上がってくるはずである。そこで、次に『婦人画報』における女性音楽家たちの扱いを概観してみよう。「闊秀

表2) 明治大正期の『婦人画報』の画報に見る女性音楽家たち

10回：三浦（柴田/藤井）環（14, 50, 51, 53, 60, 69, 71, 85, 200, 201）
9回：武岡鶴代（148, 159, 161, 163, 168, 174, 178, 222, 224）
6回：小倉末子（130, 145, 163, 174, 222, 251）、関鑑子（185, 188, 194, 215, 224, 244）、松平里子（224, 231, 241, 244, 244, 254）
5回：長坂好子（130, 158, 163, 168, 222）、柳兼子（145, 167, 168, 173, 178）
4回：安藤幸（50, 51, 166, 206）、岩田さと子（159, 161, 163, 167）、ピアノ同好会（181, 182, 196, 209）、早川美奈子（209, 211, 224, 246）
3回：北村（天野）初子（2-2, 9, 14）、天野愛子（2-2, 9, 14）、神戸絢（3-2, 51, 149）、鈴木乃婦子（159, 168, 241）、ベッツォールド（173, 211, 224）、中谷富士子（209, 218, 244）、酒井千枝子（211, 211, 218）、曾我部静子（221, 224, 244）
2回：四電蘭子・国会子・清子（14, 21）、橘糸重（50, 51）、久野久（130, 210）、チエリミノフ（159, 161）、高折寿美子（159, 161）、永井郁子（160, 168）、花鳥秀子（168, 182）、松島彝（160, 222）、立松房子（163, 174）、横山彰子（173, 174）、澁川瀧江（185, 211）、本居みどり・きみ子（191, 194）、パーロー（206, 207）、松野芳枝（209, 211）、矢追婦美子（210, 244）、門田耶蘇子（210, 211）、北田政江（211, 211）、吉川節子（211, 211）、鈴木稲子（215, 228）、関屋敏子（239, 244）
1回：松田幸子（8）、杉浦千歌子（50）、川久保美須子（50）、幸田延（51）、頼母木こま子（51）、田中久子（130）、ルアノフ（145）、ザレスカ（152）、出島せい子（167）、伊藤その子（173）、相澤ます子（173）、安村禎子（178）、金子豊子（182）、縄島美喜子（182）、鶴野君子（182）、宇佐見ため子（182）、奥村艶子（182）、横山彰子（182）、山根貞江（185）、シューマン・ハインク（186）、石橋君子（209）、堀尾幸子（209）、氏家滋子（211）、廣瀬八重子（211）、名出淑子（211）、鈴木緑（215）、金子真佐子（218）、大江克子（218）、氏家滋子（218）、宮田八重子（219）、西川はま子（222）、田川千代子（222）、幕田品子（222）、喰田久子（222）、渡邊宣子（222）、寺田ひさ子（222）、小柳たま子（222）、安武きよの（222）、窪田実枝子（222）、山川菊江（223）、古川その子（223）、福島舎子（223）、斎藤英子（224）、柴田秀子（224）、福島捨子（227）、西川とま子（227）、山浦千枝子（227）、多川遊亀子（227）、小城文子（235）、田川千代子（235）、岡見きく子（235）、浅野千鶴子（235）、中村国子（235）、藤田栄子（235）、福島つた子（237）、鹽原智子・保子（240）、伊達直子（240）、佐藤豊子（240）、佐藤直子（240）、ヴェラー（240）、宇野田鶴子（241）、澤智子（247）、千葉多可子（247）、吉澤直子（247）、留岡満都子（247）、遠山艶子（247）、田川千代子（247）、佐藤美子（248）、小城文子（250）、田中堯子（253）、吉田光子（255）

音楽家」として画報に取り上げられている女性音楽家たちを整理すると、「表2」のようになる。

ここから明らかなように、『婦人画報』においても、やはり三浦（柴田/藤井）環が10回で一番多い。次点は武岡鶴代の9回であるが、その写真の扱いは下記のようにいずれも、大人数での集合写真や、多数の写真が張り合された頁で写真の版型が小さいなど、三浦環や小倉末子の大きな写真の扱いとは同列に並べることができない。

武岡鶴代（9回）

第148号：「本誌主催婦人講話会」1頁4枚中の一枚、伴奏者との舞台写真

- 第159号：「楽壇の花」見開きに5枚中の1枚、ポートレート（5番目）
 第161号：「本誌主催慈善音楽会」1頁9枚中の一枚、伴奏者との舞台写真
 第163号：「讚美歌合唱」の集合写真1枚、14人記名中の一人
 第168号：「東京市養育院主催慈善大音楽会」の集合写真1枚、6人記名中の一人
 第174号：「本誌主催慈善音楽会」1頁4枚中の一枚、出演者3名での集合写真（従）
 第178号：「時事いろいろ」見開きに6枚中の1枚、出演者6名での集合写真
 第222号：「楽壇の明星と新進の花形諸嬢」見開きに5枚中の1枚、ポートレート（3番目）
 第224号：「師を送る楽壇の明星」見開きに6枚中の1枚、出演者3名での集合写真

なお、武岡鶴代については、加藤長江が第192号（大正10年12月1日）の「楽界評判記」で「一年中でこの二人【ピアノの榊原直と声楽の武岡鶴代】が一番ステージを踏む数が多い」と述べ、「大正9年度に武岡さんの登壇数は東京だけで独唱20回、合唱43回、合計実に63回に達します。これに地方での数を加えたら、随分多くの数を示す」だろうとした上で、「武岡さんの芸術が果して背負って立った人気と正比例するかどうかでしょう」と批判的な言説を残している。

次に多い掲載回数は6回で、小倉末子、関鑑子、松平里子の3人が並ぶが、下記から明らかのように、松平里子は九條武子等と並んで名流夫人訪問の系譜で取り上げられることが多く、音楽家としての扱いとは異なっている。画報の写真の扱いから見て、小倉末子と関鑑子はほぼ同格と言ってよい。

小倉末子（6回）

- 第130号：「御前演奏の諸閨秀音楽家」見開きに5枚中の1枚で、ポートレート（筆頭）
 第145号：「音楽会と茶会」1頁2枚中の一枚で、出演者7名での集合写真（筆頭）
 第163号：「讚美歌合唱と下阪の小倉女史」1頁2枚中の一枚で、義姉と2人のスナップ写真
 第174号：「本誌主催慈善音楽会」1頁4枚中の一枚で、出演者3名での集合写真（中央）
 第222号：「楽壇の明星と新進の花形諸嬢」見開きに5枚中の1枚で、ポートレート（筆頭）
 第251号：「十年間の沈黙を破って楽壇によみがえったピアニスト小倉末子女史」

関鑑子（6回）

- 第185号：「楽壇の花」見開き3枚中の1枚、ポートレート（筆頭）
 第188号：「福岡に於る音楽会」舞台写真のソリストとして
 第194号：「バザーと音楽会」1頁2枚中の1枚で、スナップ写真3人中の1人
 第215号：「りんどうの花」見開き3枚中の1枚、ポートレート（筆頭）
 第224号：「師を送る楽壇の明星」見開きに6枚中の1枚で、ポートレート（6番目）
 第244号：「楽壇の三花形」見開き3枚中の1枚、ポートレート（筆頭）

松平里子（6回）

第224号：「師を送る楽壇の明星」見開きに6枚中の1枚で、ポートレート（5番目）

第231号：「声楽家松平夫人の外出着」

第241号：「ピアニスト、ディック教授と松平鈴木二女史」松平里子、鈴木信子

第244号：「親しき集い」松平里子、東京社交界の美しい方々〔5名〕

第244号：「或日の松平里子夫人、名流婦人の写真訪問（1）」

第254号：「午前七時の松平里子夫人」

「表2」の上位者を見ると、三浦環、武岡鶴代、柳兼子、長坂好子、関鑑子、松平里子、鈴木乃婦子、岩田聡子はいずれも声楽で、ピアノは小倉末子ただ一人である。ピアノでは小倉末子（6回）に続くのは、神戸絢（3回）、久野久（2回）という順で、ヴァイオリンの安藤幸（4回）にも勝っている。したがって、『婦人画報』においても、以前に検討した『淑女画報』（発行期間1912～1923年）におけると同様、小倉末子は器楽奏者として第一位を占めている¹⁰⁾。

また、第209号（大正12年3月1日）で取り上げられた石橋君子、中谷富士子等を始めとして、この頃から「新進楽壇の二才媛」といった形で、東京音楽学校の新卒者たちが個々人の写真とキャプション入りで大きく紹介されるようになる。この流れも『淑女画報』におけるそれとほぼ軌を一にするもので、新進音楽家として期待されるところまで、東京音楽学校の新卒者たちのレベルが向上してきたことを示すものと考えられる。

なお、第8号（明治41年2月1日）の画報として「隠れたるピアニスト（松田幸子嬢）」が取り上げられているのは注目に値する。キャプションに「今より十年前、米独両国へ遊学してピアノを学び、8年の研究を経て一昨年帰朝し、爾来抜群の技を持ちながら未だ一回も公開の席に演奏したることなく、隠れたるピアニストとして愈々深く修養を積みつつある」とあり、ドイツで師事した恩師夫妻の写真も掲載されている。坂本清音¹¹⁾によれば、松田幸（1876～1940）は1901年から1906年まで、ベルリンでイエドリッカに師事し、幸田幸と同宿であったとされる。同志社女学校出身の先駆的な存在であった松田幸をも取り上げているところに、当時の『婦人画報』の目配りのよさを感じることができる。

4) 読物に見る小倉末子

読物の記事については、「小倉末子についての記事」と「他の記事中での言及」とに分けて考察する。

まず「小倉末子についての記事」としては、（1）第160号（大正8年6月1日）普門院科野「美しい音の国から：音楽奨励会に於ける小倉末子女史の演奏」（58-59頁）、（2）第193号（大正11年1月1日）加藤長江「楽界評判記、小倉末子女史」（71頁）、（3）第211号（大正12年5月1日）桑原樵郎「小倉末子嬢—現代女流音楽家—」（28-31頁）の3件が見出された。

この内、（1）は大正8年3月の洋琴楽発達研究演奏会シリーズの第4回「ショパン・アーベント」および第5回「ブラームスとリスト」の演奏評で、特にショパンについては楽曲の内容と演奏に踏み込んでの評となっている。普門院科野なる人物は『婦人画報』の第158号で復

生病院慈善音楽会、第159号でドレンガ・グラボフスカ夫人独奏会他、第163号でザルスマン、第167号でピアストロ他の演奏会評を書いており、第159号の記事の冒頭でも小倉末子の名を挙げている¹²⁾。

(2)の加藤長江の「楽界評判記」は、「日本一のピアニストは何人かと問われるれば、私は言下に小倉末子女史と答えるに躊躇しません」という書き出しで始まり、久野久との比較を主としている。「交際上手な令姉の感化を受けられてか、却って愛想の好い方で、恐らくは音楽学校教授中女史位の社交家はありますまい。殊に外国語も堪能で、英語の外、仏語も流暢だと言う評判です」と記され、義姉マリアと共に「赤坂氷川町の邸」の庭で写した写真が添えられている。なお、加藤長江の「楽界評判記」は、第191号の前田峯子、第192号の武岡鶴代から続くものであるが、この第193号の小倉末子でシリーズを終えている。

(3)の桑原樵郎「小倉末子嬢—現代女流音楽家—」は、小倉末子の経歴や主要な演奏歴を4頁にわたって紹介している。その最後に、小倉の人柄について「権門の前に屈しない、古武士のような嬢の性格が嬉しいではないか。この性質は嬢の鋭い双眸の中に強く輝いて人を射る光であり、嬢の芸術に一種の貴さを添える力である。そうした之は女としての嬢の生活を寂しくするかも知れないが、その代わりそれを清く高く守ってくれる力となるであろう」と結ばれており、ドイツ留学中に撮影されたと考えられる小倉の厳しい表情のポートレートが掲載されている。桑原樵郎の「現代女流音楽家」は、大正11年7月から大正13年9月まで2年余りに渡って書き継がれたシリーズで、第201号の柳兼子、第204号の立松房子、第207号の永井郁子、第208号の長坂好子、第209号の武岡鶴代、第210号の久野久子、第211号の小倉末子、第212号の弘田百合子、第214号の佐藤節子、第218号の柴田秀子、第219号の川上きよ子、第221号の宇佐見ため子、第222号の松島彝、第223号の上野久子、第225号の蜂谷龍子、第226号の室岡清枝、第227号の渡邊とり、の以上17人が論じられている。書き手の桑原樵郎についてはその正体が杳として分らないが、これらの記事を読み比べてみると、情報の正確さや詳しさ、久野久に対する思い入れの強さ等から、牛山充のペンネームだったのではないかと推測される。

次に、「他の記事中での言及」には大小様々あるが、主なものに絞ると、次の5件を挙げることができる（下線筆者）。

(1) 第206号（大正11年12月1日）14-15頁の加藤長江「大正十一年楽壇総勘定」において、「その他の邦人楽家では、アルトの曾我部静子、ピアノ海老名道子、セロの高雄吉、諸氏等新進が活動したのに比し、久野ひさ子、柳兼子、武岡鶴代諸氏等の所謂古参株がサボリ気味であったのは遺憾至極である。但しピアノの小倉末子女史は例外で、相変わらずの勉強振りを見せてくれた」とあり、ゴドウスキー、久野久子、ゼンバリスト、神戸絢子、小倉末子の5名の写真が挿絵として掲げられている。

(2) 第208号（大正12年2月1日）40-43頁の桑原樵郎「長坂好子嬢—現代女流音楽家—」において、「永井、長坂両女史……又実際に互角の力の人を二人並べて其優劣を品騁すると云うことは、常に興味あることであると見え、洋琴の方でも『久野さんと小倉さんとは、どちらが上でしょう?』とか、『高折さんと萩原さんとはどうでしょう?』と云うような問いは色々の場合に、色々の人によって発せられる。全く傾向を異にしているので、殆ど比較にならない

久野女史と小倉女史の比較論が起こり、問題とならぬ高折、萩原両氏の優劣論が問題になる世の中である」と、世間で久野との比較論が取り沙汰されることが批判されている。

ところが、(3) 第210号(大正12年4月1日)50-55頁の桑原樵郎「久野久子女史——現代女流音楽家——」では、同じ筆者が「読譜力を発達させる上から云っても、ピアノの演奏の上から論じて、二十歳近くになって漸く始めた久野女史が、五六歳の頃から稽古して、極めて幸福な環境の裡に三十年近く鍵盤に親しんで来た小倉女史や高折氏等に比し、指のテクニックと読譜力に於て久野女史が立っている不利の点は明らかである」と久野を小倉と比較して論じている。

(4) 第215号(大正12年9月1日)は秋季特大「現代令嬢号」として生まれ、54-61頁に秋野弘の「令嬢音楽家」が掲載されている。そこでは、「先ず音楽学校の勅任教授で竹柏園の歌人、橘糸重嬢があり、元音楽学校教授の幸田延子嬢があるが、是等の人々は五十以上の元老的令嬢であるから敬意を表して人間的な下界の人々の仲間には入れないこととし、第一に指を屈するのは久野ひさ子教授と小倉末子教授である。併し久野久子嬢はあつた男性的の性格の人で、極めて令嬢味に乏しい点に於て此記述の中には入れないことにし、小倉末子嬢から述べることにする。／ピアノの技術では今上野の音楽学校に居るどの先輩教授よりも上であり、一般教養の上から見ても譲る可き人がない。洋行したと云う所から云っても、美貌の持主である点から論じて、とうに結婚されて居る可き筈であるのを、なお独身で置くのは、天下に具眼の士は一人も無いのかとの嘆を聞く所以である」と現代の令嬢音楽家の筆頭格として小倉が据えられている。

最後に、(5) 第227号(大正13年9月1日)60-64頁の桑原樵郎「渡邊とり子嬢—現代女流音楽家—」においては、「久野、小倉両女史に倣って出来るだけ研究の跡を発表し、世の批評家の意見を虚心坦懐で受けるようにされたいものである」とあり、小倉が若い世代に対する手本として称揚されている。

この他、第147号(大正7年5月15日)の「増刊皇族画報」の124頁「昌徳宮李王妃殿下」の項に、「両殿下とも、いたく音楽を好ませられ、現に御殿内には大なる平台のピアノ二台まで置かせられ、御自ら奏で給うことありと。昨年末には米国より帰朝せし東京音楽学校教授小倉末子を遥々召させられ仁政殿に於て其演奏を聞召されしとぞ」との記述があり、これは大正9年5月15日付の第172号「増刊皇族画報」でも若干の修正(「昨年末には」を「先年」にする等)を加えながら、ほぼそのまま再録されている。この「皇族画報」は非常な人気を呼び、このヒットのお蔭で東京社の財政が持ち直したとされるから、普段の読者層以外にも小倉末子の名前を知らしめる媒体となったことだろう。

このように『婦人画報』においては、同時期に刊行されていた『淑女画報』に比して遥かに多くの詳しい音楽記事が掲載されており、その中で、小倉末子は中心的な存在として確固たる地位を占めていたといえることができる。

5) 令嬢の趣味に見るピアノ

明治大正期の『婦人画報』においては、「令嬢鑑」と題した頁が多数設けられ、名家の令嬢

達の美しく着飾った写真と氏名、身分、年齢、学歴が記載されている。第203号（大正11年9月1日）「本誌15年記念号」において三宅花圃が「年頃の男の子や女の子、又是等を持つ親は殊に又興味や要求を以てこの画報に親しむことと思われるは我他ともに疑いがない事実でありましょう。画報によってよき嫁を得た家も少なくはあるまいと思う」と記しているように、お見合い写真としての機能を果たしていたのであろう。

『婦人画報』の「令嬢鑑」は、『淑女画報』のそれに較べると控え目で、特技や趣味を殊更に書き立てない傾向が顕著だが、大正13年頃からその傾向が変化して、「ピアノに殊に堪能」といったフレーズが目につくようになる。

一方、「令嬢の一日」や「令嬢のおしごと」といったタイトルで、特定の個人ではなく、令嬢一般に求められる日々の仕事や稽古事を複数の写真を組み合わせて構成した画報が散見される。ここには当時の編集部が令嬢の一般的な姿、あるいは理想としてあるべき姿と想定したものが視覚化されていると考えられる。その内容を追ってみると、次のようになる。

(1) 第24号（明治42年1月1日）掲載の「令嬢の一日」では、髪結、昇校〔登校〕の準備、昇校、裁縫、園芸2枚、料理、ピアノの練習と8枚の写真で構成され、ピアノはアップライトを和服で弾いている。

(2) 第81号（明治45年4月1日）掲載の「令嬢のおしごと」では「外出、訪問、学校通い、茶の湯、お花、ピアノ演奏、化粧、弹琴」とキャプションにあり、お茶、お花、お琴に並んで、和服でアップライトを弾く姿が8枚中の1枚として加えられている。

(3) 第100号（大正3年10月1日）掲載の「奥様と令嬢のおしごと(1)」では「盆栽、洗濯、琴、生花、化粧、盆石、張り物、接客、盆景、ヴァイオリン、掃除」が見開きに11枚の写真で、「同(2)」では「ピアノ、育児、留守居、月末、学期始め、洗髪」が6枚の写真で構成されている。

以上の3件から明らかなように、伝統的な家事（裁縫、料理、洗濯、接客、掃除）と趣味（お茶、お花、お琴、盆栽、盆石、盆景）に加えて、ピアノ演奏が明治末年から大正初期にかけて、令嬢や奥様の日々の日課の一部として想定されていたことが窺われる。

このような構成物は必ずしも現実に即していた訳ではなく、理念的なものに留まっていた可能性が大きいですが、もう少し時代が下ると、実在の人物の日課として現実的に描かれるようになる。

例えば、第149号（大正7年5月1日）の画報「奥様の一日」は京都帝国大学教授厨川辰夫（白村）氏夫人蝶子の一日として示されており、見開き8枚の写真は、読書、新聞読み、弹琴、庭での写生、料理、子どもたちと蓄音機、お八つ、隠れんぼをする様子を示している。ここでの奥様は蓄音機を子どもたちと楽しむレベルに留まっている。

イラストの例ではあるが、第155号（大正8年1月1日）の「新春スケッチ」中の「うたいぞめ」の項には、和装の母の弾くリード・オルガンで子どもたちが大きな口を開けて楽しそうに歌う様が描かれており、家庭内でのオルガン演奏が生活に根づいているイメージがよく描かれている。

これが第215号（大正12年9月）まで下ると、「三令嬢の趣味生活」として東京市内麻布の実

業家山本久顕氏の家庭が実写の写真6枚で示され、そこでの夫人と3人の令嬢は、洋風のお茶を楽しみ、ピアノやギターを弾きこなし、ヴァイオリン2丁とマンドリンとピアノの合奏を自在に楽しんでいる様子が生き生きと伝えられている。

この頃になると、令嬢紹介にも、趣味や特技が詳しく書かれて、そこにピアノの語が頻出するようになる。例えば、第239号（大正14年8月1日）の「南部・毛利・日比谷三嬢」では伯爵南部利淳氏令嬢は「洋画、ピアノ、茶の湯など」、実業家日比谷任次郎氏令嬢は「琴、茶や裁縫などを修められ、ことにピアノと書道に堪能」、男爵毛利五郎氏令嬢は「仏蘭西語にピアノに洋画にいずれも達せられ」とあり、いずれも女子学習院卒業で、3人ともピアノを挙げている。同号の別の画報には、三味線や鼓を演奏する医学士令嬢姉妹や、生花と琴に精進する子爵令嬢姉妹が登場し、伝統的な教養を大切にしている流れも平行して残っていた。

この点で印象深いのは、第254号（大正15年11月1日）画報の「倉知敦子嬢」で、貴族院議員令嬢で女子学習院卒業、女子英学校在学中の敦子嬢は「しとやかな日本趣味の方ですが、ピアノだけはその例外で、ことに堪能」とキャプションにある。伝統的な日本趣味を大切にしている家庭でも、大正末年になると、ピアノを令嬢の教養から外す訳にはいなくなっていた様子が伝わってくる。

かくして、明治末期にはまだ理念的なものに留まっていたと考えられるピアノの地位が、大正期後半、1920年代に入ると大きく変化して、令嬢の教養において欠くべからざるものとなっていった様子を、これらの画報の変遷に追うことができる。

6) 懸賞和歌に見るピアノ

大正期の婦人雑誌の中には、読者会や友の会を大規模に組織して会員の拡大と定着を計るものも多かったが、『婦人画報』にはそのような傾向はあまり認められない。「懸賞小説」等の告知が出されることもあったが、読者の自由な手紙が読者コーナーに多数掲載されるといったスタイルは採っていなかった。

その中で読者の投稿欄として毎号、「懸賞和歌」のコーナーがあって、佐々木信綱および大口鯛二の選になる当選作が掲載されており¹³⁾、『婦人画報』の当時の読者たちの声を聞く貴重な窓口となっている。そのお題として「ピアノ」が選ばれたことが2回ある。大正1（1912）年10月1日の第74号と、大正9（1920）年9月1日の第176号の2回である。読者の投稿から選抜された和歌を検討することによって、当時の読者の女性たちがピアノをどのように捉えていたかを考えてみたい。

まず、第74号（大正1年10月1日）の懸賞和歌「ピアノ」（選者：佐佐木信綱）を見ると、ピアノはまだ見たこともないという歌が1首（A）、ピアノは居留地や西洋館といった異国文化の一部という感覚を示す歌が4首（B）、ピアノは学校の文化という認識を示す歌が8首（C）、子どもの頃や学校時代には弾いたが今は弾かないという感慨を示す歌（D）が多く目に着くが、その一方で、他に実際に弾いている感覚を伝える歌（E）も少数ながら見出される。

第74号（大正1年10月1日）懸賞和歌「ピアノ」（選者：佐佐木信綱）より：

- A：「田舎人まだ見もやらぬピアノなるにその名きくさへ胸のをどりつつ」（福山、藤井なつ子）
- B：「居留地の洋館の窓ふとあけば灯影とともにピアノ洩れくる」（足利、秋越ゆかり）
「空晴れて菊の花壇うつくしき西洋館にピアノ音ぞする」（名古屋、依田つねじ）他
- C：「ピアノひくおとのあはせて歌うたふ少女愛らし学びやの庭」（愛知、三浦しの子）
「なつかしきピアノのおとを聞きにけり己が学ひし学ひやの門」（愛知、遠山初子）他
- D：「幼き日ピアノ前の三十分悲しかりし練習の時」（下谷、原田治子）
「わさ卒へてももちの人の前にたちピアノかなてし昔こひしき」（岡山、わか子）
「いたつきの久しくなりてピアノうつ指先あやし涙こぼるる」（淡路、鎌田麻之）他
- E：「さびしさにピアノを弾けばうら悲し夕べこぼるる白蓮の花」（神戸、高田みつ子）
「さらばいまピアノ奏でん磯千鳥はなれて遠き君に伝へよ」（麻布、中尾はる子）
「ピアノ弾けば小さき子供輪になりて声はり上げて桃太郎の歌を」（成田、小野寺英子）
他

これが8年後の第176号（大正9年9月1日）になると、全体のバランスが大きく変わってくる。ピアノが身近になくて聞いたり見たりできないという歌（A）、ピアノは居留地や西洋館といった異国文化の一部という感覚を示す歌（B）、ピアノは学校の文化という認識を示す歌（C）、子どもの頃や学校時代には弾いたが今は弾かないという感慨を示す歌（D）もまだ残っているが、実際に自分で弾いている感覚を伝える歌（E）が様々に見出される。その中には、ピアノをようやく購入した喜び（E1、E2）、新しい楽譜を手にした喜び（E3）、避暑から戻って久し振りにピアノに触れる感慨（E4）、入浴後の日常的なピアノの演奏（E5）、家庭での姉妹の演奏の楽しさ（E6）、夫の外遊の寂しさを紛らすためのピアノ演奏（E7）、夫婦団欒としてのピアノ演奏（E8）等、多様な広がりがある。ピアノが実際の生活の中で定着し、ピアノを弾くことを内面化した人々の層が幅広く拡大していることが実感される。

第176号（大正9年9月1日）「ピアノ」（選者：佐佐木信綱）

- A：「鋤鍬を握る田舎の娘なりけりピアノの音色聞く由もなし」（神戸、畑里子）
「草深き里にしあれば二十年をピアノ見しことなきぞかなしき」（越後、島原美代志）
- B：「居留地のポプラわたる夕風にピアノもれぬそぞろあるけば」（岡山、入澤政恵）
「洋館は池のあなたに暮れにけり灯洩れてピアノ聞ゆる」（小石川、島津よし子）
「久方に都に來れば教会のピアノの音も懐かしき哉」（静岡、寺尾金子）
- C：「久々に母校をとへばなつかしきピアノのしらべまづ耳に入る」（京城、加茂ふみ子）
「ピアノの音ふと足とめて打ち見れば幼年校の学舎なりけり」（熊本、米本徳栄）
- D：「ピアノの音に歌ひし頃をおもふ毎に嫁ぎし前の若き身恋し」（山形、今野春子）
「学びやをいでて後の怠りはピアノに積る塵に見えけり」（赤坂、長谷川まさ子）
- E：E1「いとし子のせつなねがひにピアノをば買ひ得たる今日ぞ母も嬉しき」（兵庫、

貞子)

- E2)「小をどりにおどり立つよな心地してわが手をふるるピアノの前に」(京都、杉本キク子)
- E3)「新しき譜を得て今日は嬉しさにピアノによりてひねもす過ぎぬ」(鳥取、田中花子)
- E4)「海辺より帰りてくろくやけし手を久々にしてキイにふれみぬ」(大森、山本はな子)
- E5)「湯あみして月の光をかなづればピアノ音いととさえ渡りけり」(京都、秋風)
- E6)「きたくせし姉とピアノの前に立ち何をひかうと語る楽しさ」(山形、中條てるの子)
- E7)「背の君は海のあなたに使用して淋し今宵をピアノ奏づる」(小石川、島津てる子)
- E8)「わが夫は帰り来ませり今日もまた笑顔較べんピアノの前に」(茅ヶ崎、増山正)

他に、第79号(大正2年2月1日)「姉」(選者：佐佐木信綱)にピアノを歌い込んだ次の一首がある。

「音もなきピアノを見れば思ふかな別れの曲をひきし姉君」(秋田、山萩)

第100号(大正3年9月1日)の「母」、第122号(大正5年5月1日)の「姉」、第131号(大正6年2月1日)の「姉」(いずれも選者：大口鯛二)、第182号(大正10年3月1日)の「妹」(選者：佐佐木信綱)には、琴を歌い込んだものはあっても、ピアノを歌い込んだものはない。母でもなく、妹でもなく、ピアノは姉と結びついた存在として捉えられていたようである。

7) 大正期の女性と音楽

以上、今回の『婦人画報』の調査によって、(1)小倉末子の掲載は、口絵として6回、イラストとして1回、単独の(タイトルに小倉末子の名前が入っている)記事が3件、他の記事中でまとまった言及が5件、皇族画報での言及が1件(2刷)あること、(2)口絵の写真6回は、(回数は多いものの各写真の扱いの小さい)武岡鶴代の9回を別とすると、三浦環の10回に次ぐものであり、器楽奏者としては第一位であること、(3)令嬢たちの伝統的な教養(琴、茶の湯、生花等)に明治末からピアノが入り始め、大正期、とりわけ1920年代に広く普及していく様子が見られること、(4)読者の声を知る一助として、懸賞和歌を手掛かりに「ピアノ」のイメージと浸透の具合を検討したところ、大正1(1912)年と大正9(1920)年との間に有意の差が認められること、が明らかになった。

和田敦彦「読書行為と雑誌表現——「婦人画報」の夢見る規則」(1994)¹⁴⁾によれば、『婦人画報』のようなグラフィック雑誌の場合は特に、画報と読物と広告との相互関係の中で複合的な「読みの場」「読書行為の場」を理解していく必要があると言う。画報と読物、口絵と本文記事、さらに広告表現をも含めた総合的な読みの可能性については、今後の課題としたい。

謝辞

この研究は、日本学術振興会科学研究費補助金基盤研究（C）課題番号22520164「ピアニスト」の誕生を考える：明治末期から昭和初期の本邦洋琴家事情の解明」、および神戸女学院大学研究所2012年度「研究助成」（研究課題：明治期の本学音楽教育史料の調査研究）によって支えられていることを感謝して記す。

注

- 1) 戸籍上は「小倉末」であるが、演奏会プログラムの多くや3冊の著書において「小倉末子」を使用していることから、ここでは後者の表記を採用している。
- 2) 前田愛『近代読者の成立』（有精堂、1973）211頁以降の「大正後期通俗小説の展開——婦人雑誌の読者層」参照。
- 3) 永嶺重敏『雑誌と読者の近代』（日本エディタースクール出版部、1997年）ii頁。
- 4) 誌名および発行社名の変遷は次の通り。
『婦人画報』（近事画報社）第1巻第1号（明治38年7月）～第3年第6号（明治40年6月）
『東洋婦人画報』（東京社）第1号（明治40年8月）～第24号（明治42年3月）
『婦人画報』（東京社）第25号（明治42年4月）～第482号（昭和19年4月）
『戦時女性』（東京社）第483号（昭和19年5月）～第493号（昭和20年9月）
『婦人画報』（婦人画報社）第494号（昭和20年10月）～第1156号（平成11年11月）
『婦人画報』（アセット婦人画報社）第1157巻（平成11年12月）～現在
- 5) 鷹見本雄『国木田独歩の遺志継いだ東京社創業・編集者鷹見久太郎』（個人書店、2009）によれば、鷹見久太郎は日本のグラフィック雑誌発行の先駆者、国木田独歩の後継者と位置づけられている。
- 6) 今回は、第1巻第1号から第2巻第5号、第120号から第255号までの156冊については全頁調査、第2巻第6号から第119号までの129冊については口絵部分の全頁調査を行った。
- 7) 小倉末子の生涯と音楽活動については、津上智実編著『100年前の卒業生、ピアニスト小倉末子の軌跡、図録』（神戸女学院小倉末子展実行委員会、2010）、および津上智実、橋本久美子、大角欣矢著『ピアニスト小倉末子と東京音楽学校』（東京藝術大学出版会、2011）を参照。
- 8) 『歴史写真』大正7年4月号にも掲載がある。
- 9) 『淑女画報』第12巻8号（1923年8月）にも掲載がある。
- 10) 『淑女画報』における扱いについては、津上智実「婦人グラフ雑誌『淑女画報』（1912～1923）に見るピアニスト小倉末子と関秀音楽家たち」『神戸女学院大学論集』第168号（2012年5月発行）121-132頁を参照。
- 11) 坂本清音「草創期（1876年-1900年）同志社女学校の音楽教育」『同志社叢書』第18号（1998年3月）67-94頁。
- 12) 「***様、二月の中頃お便りを致してからしばらく良い音楽に親しむ機会を与えられませんでした。三月の末になってから、まず音楽学校の卒業試験を始めとし、ドレンガ・グラボフスカ夫人独奏会、音楽奨励会の小倉末子嬢のショパンの夕など、続けて美しい演奏を沢山聴くことが出来ました。」と書簡体の書き出しにある（下線筆者）。
- 13) 大口鯛二が病気のために大正9年9月を最後に退いた後、同年12月から与謝野晶子が同コーナーを佐佐木信綱と二人で担当した。なお懸賞は一等が『婦人画報』3ヶ月分、二等が同2ヶ月分、三等が同1ヶ月分であった。
- 14) 和田敦彦「読書行為と雑誌表現—「婦人画報」の夢見る規則」『文学』第5巻第3号（岩波、1994年7月）74-84頁。

（原稿受理日 2012年10月1日）